

ミシェル・テヴォー
『アール・ブリュット』(人文書院) 刊行記念
&
ローズマリー・コートイー展開幕記念トークイベント

野生芸術の創造力

杉村昌昭×鈴木創士

(『アール・ブリュット』 記者、フランス文学) (批評家、翻訳家、ミュージシャン)

1975年に刊行されたアール・ブリュット論の重要書が、今年五月に初めて邦訳された。本書は、障害者福祉の文脈のみで理解されがちな本邦のアール・ブリュット理解を打ち砕く一助となるだろう。訳者でフランス文学者の杉村昌昭氏と、同じくフランス文学者で数々の批評、翻訳および音楽活動でも知られる鈴木創士氏を迎えた、野生芸術ともいべきアール・ブリュットの魅力を伝えるトークイベント。



日時：2017年9月2日(土) 15時～
会場：ギャラリー一宮脇 (京都市中京区寺町通二条上る東側)

参加費 1000円、定員 50人、要申込

申込はメールで matsuoka@jimbunshoin.co.jp (人文書院編集部 松岡隆浩)

主催 人文書院

612-8447 京都市伏見区竹田西内畑町9 電話 075-603-1344 FAX075-603-1891

アール・ブリュット 野生芸術の真髄

ミシェル・テヴォー〈著〉

杉村昌昭訳 人文書院 5184円

抵抗と闘争を続ける表現者



Michel Thévoz 36年生まれ。スイス・ローザンヌ大卒業後、州立美術館員を経て、ローザンヌのアール・ブリュット・コレクションの館長を務める。著書に『不実なる鏡 絵画・ラカン・精神病』など。

本書は、日本でもこのところ頻繁に見掛けるようになったアール・ブリュットをめぐる古典的な一冊。フランスの画家ジャン・デュビュッフェが、それまでの体制順応的な美術に飽き足らず、1945年に着想した。その担い手は、既存の美術界とは無縁の天涯孤独な監禁者や、他人の目には見えない精霊に導かれた霊媒たちで、堅苦しい学問的な定義などない代わり、その種が撤かれる領野は、きわめて広範囲にわたっていた。

ところが、私たちが目にするアール・ブリュットは、知的障害を持った人たちが、滞在する施設の利用時間を使って作られる指導された絵や工作に限定されすぎていないか。無垢の芸術といった形容が施されることも少なくない。しかし、この分野の原点であるデュビュッフェによ

るコレクションの管理、運営、収集を一任されてきた著者の考えは、大幅に異なっている。

アール・ブリュットとは、そのまま訳せば「生の芸術」となる。だが、翻訳者がサブタイトルで補っているように、実際には無垢よりも野生のほうがはるかに近い。無垢だけでは抑圧的な社会的制度を前に無力だが、野生な者は既存の価値観に容易には順応せず、最後まで抵抗し続けるからだ。事実、本書で核心に据えられている表現者たちは、極度の貧困や孤独とい

った劣悪な環境下、まったく独自なやり方で描くことや作ることを再発見し、気の遠くなるような時間の積み重ねのなかから、有無も言わせぬかたちで自己を取り戻していく。

それは、あらかじめ権威づけられた制度のなかで、どのような地位を占めるかばかりに奔走する文化・芸術からは、もっとも遠いところにある。たとえば、生産活動から切り離され、社会的にも負の側面ばかりが語られがちな高齢者たちは、その有力な担い手になりうる

は説く。アウトサイダー・アートとも呼ばれるゆえんである。

だが、日本でのアール・ブリュットをめぐる近年の奇妙な足並みの揃い方を見ていると、デュビュッフェの思いとはまったく逆の方向に進んでいないだろうか。公立の美術館で立派な展覧会が開かれ、アール・ブリュットの専門家がおおやけにその価値を説く。半面、もともと備わっていたはずの抵抗や闘争の側面はほとんど切り落とされる。そこに、間近に迫ったオリンピック・パラリンピックをめぐる国や自治体によるアール・ブリュットの政策芸術化が進行しているのを忘れてはならない。

刊行から40年以上経ての翻訳は遅きに失した感がなくもないがこれを機に和製アール・ブリュットの濫用に歯止めがかかることを期待したい。図版多数。

評・榎木 野衣

美術批評家・多摩美術大学教授